

大学生の「居場所環境」と精神的健康との関連 —過去の「居場所環境」の認知との比較を中心に—

杉本 希 映*

庄 司 一 子**

問題の所在と目的

昨今の「居場所」への注目は、1980年代不登校問題から発したといわれている（安齋，2003；住田，2003a）。学校に「居場所」がない子どもたちのための「居場所」づくりの動きから、「居場所」への関心が高まってきているといえる。1992年には、文部省学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否（不登校）問題について—児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して—」という報告を出し、学校内での「心の居場所」づくりの必要性が指摘されるに至った。これにより、子どもの「居場所」づくりが学校の内外で盛んになり、実践報告も数多く出されている（例えば小野，1993；小野，1994；高橋，1994）。研究の分野でも、「居場所」を実証的に分析していく動きが、1990年代後半から見られるようになるが、課題も多い。

「居場所」という言葉の定義は、「児童生徒が存在感を実感することができ、精神的に安心していることのできる場所」（文部省，1992）、「安心して身を置くことのできる場所」（上野，1992）、「自己存在感が得られる場所」（坂本，1993）というように、単に「人がいる居場所」という辞書的な意味だけではなく、心理的な意味が含まれているものが多い。しかし、いまだに確立しておらず、使用者によって異なっているのが現状である。これまで使用されている定義も実証的なデータに基づいた定義ではないという問題点を有している。

そのような中で、「居場所」の実証的研究は

どのように行われているのだろうか。これまでの「居場所」の研究方法には、2つのアプローチがあると考えられる。1つ目は、人が実際にいる場所を調査し分析する方法である。たとえば、学校を調査対象とした研究（深谷・永井・山田，2001）などがあり、心理的な意味を含めない辞書通りの「居場所」研究としては、意義のあるものである。しかし、確かに物理的に居る場所ではあるが、「居場所」とは感じていないという場所、たとえば、本人は行きたくないが仕方なく行っている学校なども含まれてしまうため、本人の主観が無視されることとなる。よって、現代の心理的な意味を含んだ「居場所」を捉えていくには問題のあるアプローチといえる。

2つ目のアプローチは、「ここは自分の居場所である」と知覚した場所を調査対象とし、分析する方法である。これらは、対象者から居場所と感ずる場所をあげてもらい、それらを分析する手法をとっており、「居場所」の心理的な意味を探っていく手法として適しているといえる。しかしこのアプローチには、上述したように「居場所」の概念が統一定義を得ていないために、対象者個人の捉え方により「居場所」がかなり違ったものになるという問題が生じる。「自分の好きなマンガの中」といった空想の世界の中を「居場所」という子もいれば、「友だち」のように場所ではなく人を「居場所」と捉える子もいるだろう。よって、研究によって捉えたい「居場所」を操作的に定義していく必要がある。このアプローチ法による研究は、「居場所」の形成要因を探り「居場所感」尺度の作成を行う研究（大久保・青柳，2000；小畑・伊藤，2003；堤，2002）、「居場所」を分類してその特徴を明らか

* 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科

にする研究（松田，1997），発達的な変化を分析する研究（住田，2003b；富永・北山，2003）がある。加えて近年では、「居場所」と個人の精神的諸側面との関連に関心が集まりつつある。問題提起が不登校問題であったということもあり，学校適応との関連を分析した研究が多く，その関連が示されている（檜皮・浅川・古川，2002；稲葉・西・古川・浅川，2001；田中・田嶋，2004；豊田・宮崎・大寺・小澤・芳賀，2000）。

しかし、「居場所」の精神的な側面への影響は，単にその時期の適応の問題だけなのだろうか。「居場所」の研究は，長期的な影響をも明らかにすることが必要だと考えられるが，この点を明らかにした研究は見当たらない。文部省の提言（1992）を始め，現在，学校教育現場で盛んに行われ始めている「居場所づくり」ではあるが，「居場所」とは何か，「居場所」の持つ機能は何か，「居場所」の与える影響は何か，という実証的な研究が後回しにされている感が否めない。したがって，学校教育上の諸問題に対する「居場所」という視点からのアプローチの意義と有効性を示していかなければならないと考える。

そこで本研究では，中学生からはじまる青年期に焦点を当て，最も基礎的な心理的側面である精神的健康と「居場所」との関連と影響を，大学生の現在の「居場所」と過去を回想した時の中学生の頃の「居場所」つまり現在と過去の「居場所環境」の比較を通して明らかにすることとした。本研究における「居場所」の操作的定義は，はじめから「落ち着く場所」のように限定的に捉えることは避ける。しかし，「居場所」であると自分で知覚している場所であることと，日常生活の具体的な場所であること，という本研究で捉えたい「居場所」を分析対象とするために，そこでの精神状態を限定しないことを考慮し，「いつも生活している中で，特にいたいと感じ，いられる場所」とし，調査時に質問紙に付記することとした。「いたい場所」とは，「自分が居場所と感じている場所」という主観性を示したもので，単に人がいる場所としての居場所と区別するために設定した。

「居場所」と精神的健康を検討した研究は，非常に少ない。大学生の抑うつ感との関係を検討した田島の研究(2000)，同様に大学生の自我同一性との関係を検討した堤の研究(2002)がある程度で，全般的な精神的健康との関連を検討したものは見当たらない。「居場所」ではないが，近い概念としてソーシャル・サポートと精神的健康との関連を検討した研究は多い（例えば，中学生のソーシャル・サポートと学校ストレスとの関連を検討した岡安・嶋田・坂野[1993]の研究，中学生のソーシャル・サポートとストレス反応を検討した今村・服部・中村[2003]の研究など）。これらの研究の基本的な仮定は「ソーシャル・サポート，すなわち，ある人を取り巻く重要な他者から得られるさまざまな形の援助は，その人の健康維持・増進に重大な役割を果たす」（久保，1987）ということであり，精神的健康とソーシャル・サポートのポジティブな関連も明らかにされている。したがって，対人関係が重要な要因である「居場所」も精神的健康に寄与していることが推測され，検討する意義があると考えられるのである。

ところで，杉本・庄司（2003）は，現代の小・中・高校生の「居場所」の心理的機能には，「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6つの因子があることを明らかにし，そのうえで，「居場所」を対人関係により「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人のいる居場所」の3つに分類して分析を行っている。この結果から，特に中学生以降の子どもたちは，1つの「居場所」ですべての機能を充足することは困難であり，発達に応じて，固有の機能を持った様々な「居場所」を複数持つことで「居場所」の機能を充足しているのではないかと推察を得ている。以上の点から，今後の「居場所」研究は，個人が持っている複数の「居場所」を包括的に捉えて分析するという，新たな視点が必要である。そこで本研究では，個人を取り巻く「居場所」を包括的に捉えるために，「居場所環境」という視点を導入した。「居場所環境」とは，どのような固有性を持った「居場所」を

どのようなバランスでいくつ所有しているのかを表す用語として使用する (Figure1)。

以上の点より、本研究では、大学生を対象に、大学生の現在の「居場所環境」と過去の「居場所環境」の様相を把握し、そのうえでそれぞれの「居場所環境」が精神的健康とどのように関連し、影響を与えているかを明らかにすることを目的とする。具体的には、現在の「居場所環境」とともに、中学生の頃の「居場所環境」を回想法で捉え、それらと一般精神健康調査票 GHQ の日本語版との関連を検討する。

方法

1. 調査対象者

首都圏内の私立大学2校、独立行政法人大学1校の学生計330名(男子177名・女子153名)を調査対象とした。平均年齢は19.66歳($SD=1.10$)、年齢の範囲は18歳から23歳であった。

2. 調査時期・手続き

2005年7月上旬に、各大学の講義時間中、集団形式で実施し、回答は無記名で行われた。

3. 質問紙

フェイスシートで、性別・年齢について尋ねた後、以下項目について回答を求めた。

- (1) GHQ28 「身体症状」7項目、「不安と不眠」7項目、「社会的活動障害」7項目、「うつ傾向」7項目。回答方法は、4件法(各項目により、選択肢は異なる)であり、高得点であるほど健康度が低いことを示す。今回は通常のGHQ方式(4件法の回答に0, 0, 1, 1点を与える)ではなく、得点が正規分布しやすいよう4件法の回答にそのまま1~4点を与えることとした。
- (2) 「居場所環境」に関する質問: 「居場所」について「居場所とは、いつも生活している中で、特にいたいと感じ、いられる場所とお考えください」という説明を付記した上

で、中学生の頃と現在の「居場所」の有無を2択で回答を求めた。以下、「ある」と回答したもののみ、中学生と現在のそれぞれの「居場所」の具体的な場所を5つまであるだけ自由記述してもらい、その各「居場所」に対して、「1:じぶんひとり、2:家族がいる、3:友だちがいる、4:家族・友だち以外の人がいる(誰かを具体的に記入)」のどれにあてはまるか、あてはまる数字1つの選択を求めた。

結果

1. GHQ28 尺度について

GHQ28の4つの下位尺度とすべての合計ごとにそれぞれ合成得点(各項目を合計し項目数で除したものを)算出した。4つの下位尺度ごとの平均値と標準偏差はTable1に示す通りである。男女で差があるか否かを検討するために、 t 検定を行ったところ、「不安と不眠」のみ有意差が認められ、男子よりも女子の方が高かったが、他では有意差は認められなかった。

2. 「居場所」数と精神的健康との関連

(1) 現在の「居場所」数との関連

分析に先立ち、GHQの4つの下位尺度と合計の合成得点を、平均値により高群と低群に分けた。なお高群の方が、健康度が低い状態を示す。現在の「居場所」数と精神的健康と関連を検討するために、「居場所」数についてGHQの高群・低群により t 検定をおこなった。結果をTable2に示す。「身体症状」「不安と不眠」以外で有意差が認められ、低群の方が高群より「居場所」数の平均値が高かった。よって、「社会活動障害」と「うつ傾向」で健康度の高い方が「居場所」を多く持つ傾向が明らかとなった。

(2) 中学生の頃の「居場所」数との関連

Table 1 GHQの下位尺度の男女別平均値(標準偏差)と t 検定の結果

	df	男子	女子	t 値	
身体症状	316	2.18 (.64)	2.24 (.62)	.85	<i>n.s.</i>
不安と不眠	315	2.21 (.66)	2.38 (.65)	2.26	*
社会的活動障害	310	2.15 (.42)	2.12 (.47)	.59	<i>n.s.</i>
うつ傾向	318	1.62 (.67)	1.68 (.71)	.83	<i>n.s.</i>
合計	307	2.04 (.46)	2.10 (.49)	1.19	<i>n.s.</i>

* $p < .05$

中学生の頃の「居場所」数と精神的健康との関連を検討するために、GHQの高群・低群でt検定をおこなった (Table3)。「身体症状」以外において、有意差が認められ、低群の方が高群より「居場所」数の平均値が高かった。よって、「身体症状」以外で健康度が高い方が「居場所」

を多く持つ傾向が明らかとなった。

3. 「居場所環境」と精神的健康との関連

「居場所環境」の質問に対する回答を基に、Figure1のように「居場所環境」を8群に分類した。Table4に、分類の内容と人数、以降の記述における省略した表記を示した。

Table 2 GHQ高群・低群別現在の「居場所」数の平均値 (SD) と t 検定の結果

	df	低群	高群	t値	
身体症状	315	2.85 (1.35)	2.86 (1.30)	.10	n.s.
不安と不眠	315	3.01 (1.32)	2.72 (1.31)	1.95	n.s.
社会的活動障害	315	3.11 (1.21)	2.63 (1.38)	3.27	***
うつ傾向	315	3.18 (1.24)	2.39 (1.30)	5.51	***
合計	312	3.13 (1.27)	2.56 (1.33)	3.89	***

*** $p < .001$

Table 3 GHQ高群・低群別中学生の頃の「居場所」数の平均値 (SD) と t 検定の結果

	df	低群	高群	t値	
身体症状	319	2.96 (1.33)	2.90 (1.35)	.36	n.s.
不安と不眠	319	3.15 (1.30)	2.74 (1.34)	2.77	***
社会的活動障害	314	3.21 (1.13)	2.68 (1.46)	3.70	***
うつ傾向	258	3.24 (1.20)	2.50 (1.41)	4.90	***
合計	305	3.25 (1.21)	2.59 (1.39)	4.48	***

*** $p < .001$

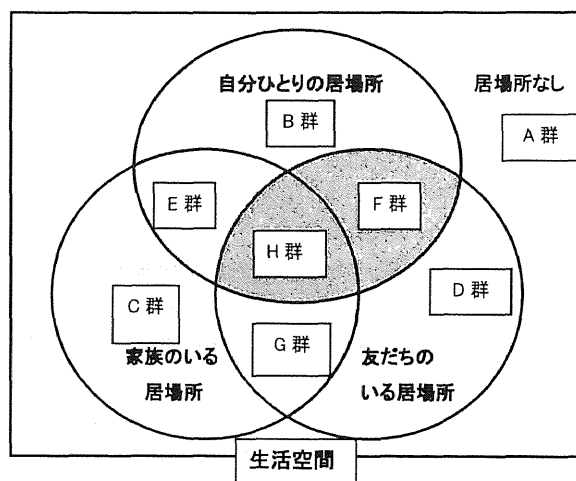


Figure 1 本研究における「居場所環境」の8分類

Table 4 「居場所環境」の8分類と人数

N(中学生/現在)	分類の内容	(略)
A群 (21/17)	「居場所」なし	(なし)
B群 (12/31)	「自分ひとりの居場所」1種類のみ	(ひとりのみ)
C群 (6/1)	「家族のいる居場所」1種類のみ	(家族のみ)
D群 (13/17)	「友だちのいる居場所」1種類のみ	(友だちのみ)
E群 (17/14)	「自分ひとりの居場所」と「家族のいる居場所」2種類	(ひとり+家族)
F群 (31/88)	「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」2種類	(ひとり+友だち)
G群 (70/9)	「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」2種類	(家族+友だち)
H群 (116/97)	「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」(3種類すべて)	
合計 (286/274)		

(1)現在の「居場所環境」との関連

現在の「居場所環境」との精神的健康との関連を検討するために、分散分析を行った。なお、「居場所環境」8分類のうち、度数が少なかったC群(家族のみ, $n=1$)とG群(家族+友だち, $n=9$)は分析から除外した。その結果をTable5に示す。

「身体症状」「社会的活動障害」「うつ傾向」「合計」において有意傾向及び有意差が認められた。多重比較(Tukey-HSD法, 5%水準)の結果, 「身体症状」では, F群(ひとり+友だち)よりH群(3種類すべて)が有意に高く, H群(3種類すべて)の方が身体症状が良くない状態であることが示された。「社会的活動障害」では, E群(ひとり+家族)・F群(ひとり+友だち)・H群(3種類すべて)がA群(なし)より, F群(ひとり+友だち)・H群(3種類すべて)がB群(ひとりのみ)より有意に低いことが示された。「うつ傾向」では, F群(ひとり+友だち)・H群(3種類すべて)がA群(なし)・D群(友だちのみ)より有意に低く, H群(3種類すべて)がB群(ひとりのみ)より有意に低いことが示された。「合計」では, F群(ひとり+友だち)がA群(なし)・B群(ひとりのみ)より有意に低いことが示された。

(2)中学生の頃の「居場所環境」との関連

中学生の頃の「居場所環境」との精神的健康との関連を検討するために、分散分析を行った。なお、「居場所環境」8分類のうち、度数が少なかったC群(家族のみ, $n=6$)は分析から除外した。その結果をTable6に示す。

4つの下位尺度と合計すべてで、有意差が認められた。多重比較(Tukey-HSD法, 5%水準)の結果, 「身体症状」では, E群(ひとり+家族)・G群(家族+友だち)がD群(友だちのみ)より有意に低く, E群(ひとり+家族)がD群(友だちのみ)・F群(ひとり+友だち)より有意に低かった。「不安と不眠」では, G群(家族+友だち)がA群(なし)より有意に低かった。「社会的活動障害」では, G群(家族+友だち)・H群(3種類すべて)がA群(なし)・D群(友だちのみ)より有意に低かった。「うつ傾向」「合計」では, E群(ひとり+家族)・G群(家族+友だち)・H群(3種類すべて)がA群(なし)・D群(友だちのみ)より有意に低かった。よって、精神的健康が有意に低く、健康度が良好な群は、「家族のいる居場所」が含まれている群であることが示された。

Table 5 現在の「居場所環境」によるGHQの4つの下位尺度と合計の平均値(SD)と分散分析の結果

	A群	B群	D群	E群	F群	H群	F値	
N	17	30	16	14	85	97		
身体症状	2.17 (.69)	2.36 (.74)	2.13 (.75)	2.26 (.53)	2.04 (.57)	2.30 (.58)	2.09 †	F<H
不安と不眠	2.50 (.77)	2.51 (.76)	2.17 (.62)	2.35 (.54)	2.22 (.62)	2.31 (.69)	1.30	n.s.
社会的活動障害	2.55 (.50)	2.43 (.52)	2.22 (.40)	2.09 (.29)	2.04 (.44)	2.08 (.40)	6.97 ***	E,F,H<A F,H<B
うつ傾向	2.14 (1.01)	1.91 (.77)	2.07 (.92)	1.94 (.75)	1.52 (.52)	1.50 (.55)	6.63 ***	F,H<A,D H<B
合計	2.34 (.58)	2.29 (.60)	2.15 (.55)	2.13 (.42)	1.96 (.41)	2.04 (.42)	3.66 **	F<A,B

† $p < .10$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 6 中学校の頃の「居場所環境」によるGHQの4つの下位尺度と合計の平均値(SD)と分散分析の結果

	A群	B群	D群	E群	F群	G群	H群	F値	
N	21	12	12	17	30	69	112		
身体症状	2.33 (.68)	2.43 (.66)	2.65 (.64)	1.85 (.41)	2.41 (.81)	2.05 (.66)	2.20 (.55)	3.61**	E,G<D E<D,F
不安と不眠	2.64 (.83)	2.60 (.56)	2.65 (.65)	2.15 (.50)	2.36 (.80)	2.16 (.63)	2.24 (.65)	2.69*	G<A
社会的活動障害	2.51 (.40)	2.33 (.51)	2.48 (.44)	2.13 (.39)	2.26 (.61)	2.05 (.39)	2.03 (.39)	6.39**	G,H<A,D
うつ傾向	2.22 (.87)	2.03 (.50)	2.47 (.92)	1.46 (.47)	1.82 (.69)	1.53 (.64)	1.51 (.60)	8.51***	E,G,H<A,D
合計	2.43 (.53)	2.35 (.44)	2.56 (.43)	1.90 (.32)	2.21 (.62)	1.94 (.46)	1.99 (.41)	7.51***	E,G,H<A,D

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

4 「居場所環境」が精神的健康に与える影響の比較

(1) 「居場所」の有無が精神的健康に与える影響

以上の結果より、精神的健康が全般的に良くないのは、「居場所環境」の分類の中のA群（「居場所」なし）であることが明らかとなった。そこで、中学生の頃の「居場所」の有無の認知と現在の「居場所」の有無が、精神的健康に与える影響を検討するために、それぞれの時期の「居場所」の有無を独立変数、精神的健康の下位尺度と合計を従属変数として重回帰分析（強制投入法）を行った（Table7）。

その結果、中学生の頃の「居場所」の有無の認知では、「不安と不眠」「社会的活動障害」「うつ傾向」「合計」の4つに影響力を持ち、現在の「居場所」の有無は、「社会的活動障害」のみに影響力を持つことが明らかとなった。現在の「居場所」の有無よりも、中学生の頃の「居場所」の有無の認知の方が、精神的健康に対してより影響を与えていることが示された。

(2) 「居場所環境」の種類が精神的健康に与える影響

「居場所」の有無が、精神的健康に影響を及ぼしていることが明らかとなったが、更に「居場所」がある人の中でも、「居場所環境」の種類により影響に差異があることが推測される。そ

こで、「居場所環境」の中の「自分ひとりの居場所」の有無（ある群は、B群[ひとりのみ]・E群[ひとり+家族]・F群[ひとり+友だち]・H群[3種類すべて]、ない群はその他）、「家族のいる居場所」の有無（ある群は、C群[家族のみ]・E群[ひとり+家族]・G群[家族+友だち]・H群[3種類すべて]、ない群はその他）、「友だちのいる居場所」の有無（ある群は、D群[友だちのみ]・F群[ひとり+友だち]・G群[家族+友だち]・H群[3種類すべて]、ない群はその他）が、精神的健康に影響を及ぼしているか否かを検討することとした。それぞれの時期の3種類の「居場所」の有無を従属変数、精神的健康を独立変数とし、重回帰分析（強制投入法）を行った（Table8）。

その結果、「身体症状」では、中学生の頃の「居場所環境」の中の「家族のいる居場所」の有無と「友だちのいる居場所」の有無、現在の「居場所環境」の中の「家族のいる居場所」の有無と「友だちのいる居場所」の有無で有意な影響力が認められた。しかし、中学生の頃と現在では、逆の結果となっており、中学生の頃に「家族のいる居場所」があったと認知していると「身体症状」は良いが、現在「家族のいる居場所」があると良くない傾向が示された。「友だちのいる居場所」では、中学生の頃にあったと認知していると「身体症状」は悪く、現在あると良いという傾向にあることが示された。

Table 7 「居場所」の有無を独立変数、GHQを従属変数とする重回帰分析の結果

	身体症状	不安と不眠	社会的活動障害	うつ傾向	合計
中学生の頃の「居場所」の有無	-.09	-.14 *	-.14 *	-.18 **	-.18 **
現在の「居場所」の有無	.07	-.01	-.17 **	-.08	-.05
説明率(R^2)	.01 <i>n.s.</i>	.02 *	.07 ***	.05 ***	.04 **

* $p < .01$ ** $p < .05$ *** $p < .001$

Table 8 3種類の「居場所」の有無を独立変数、GHQを従属変数とする重回帰分析の結果

	身体症状	不安と不眠	社会的活動障害	うつ傾向	合計
中学校「自分ひとりの居場所」の有無	-.02	-.01	-.01	-.03	-.02
「家族のいる居場所」の有無	-.22 **	-.16	-.21 **	-.26 ***	-.27 ***
「友だちのいる居場所」の有無	.16 *	.02	-.05	.03	.05
現在「自分ひとりの居場所」の有無	-.06	.02	-.14 *	-.22 **	-.13 †
「家族のいる居場所」の有無	.22 **	.10	.04	.07	.13 †
「友だちのいる居場所」の有無	-.17 *	-.13	-.20 **	-.23 ***	-.21 **
説明率(R^2)	.11 **	.05 <i>n.s.</i>	.11 ***	.17 ***	.13 ***

† $p < .10$ * $p < .01$ ** $p < .05$ *** $p < .001$

「社会的活動障害」では、中学生の頃の「家族のいる居場所」の有無、現在の「自分ひとりの居場所」の有無と「友だちのいる居場所」の有無で有意な影響力が認められ、この3つがあると「社会的活動障害」の得点が低い、つまり社会的活動に障害がない傾向にあることが示された。

「うつ傾向」では、中学生の頃の「家族のいる居場所」の有無、現在の「自分ひとりの居場所」の有無と「友だちのいる居場所」の有無で有意な影響力が認められ、この3つがあると「うつ傾向」は低くなることが示された。

「合計」では、中学生の頃の「家族のいる居場所」の有無、現在の「自分ひとりの居場所」の有無と「家族のいる居場所」の有無と「友だちのいる居場所」の有無で有意な影響力が認められた。「家族のいる居場所」以外は、あると精神的健康全般が良好であることが示されたが、「家族のいる居場所」のみは別の結果となっており、中学生の頃にあったと認知していると良好であるが、現在あると良好ではないことが示されている。

中学生の頃の「居場所環境」では、「家族のいる居場所」の有無が、「身体症状」「社会的活動障害」「うつ傾向」「合計」の4つに影響を与えており、最も影響力を持っていることが示された。一方、現在の「居場所環境」では、「友だちのいる居場所」の有無が、「身体症状」「社会的活動障害」「うつ傾向」「合計」の4つに影響を与えており、「自分ひとりの居場所」の有無が「社会的活動障害」「うつ傾向」「合計」の3つに影響を与えていることが示された。よって、中学生の頃の「居場所環境」の中に「家族のいる居場所」が含まれていること、現在の「居場所環境」の中に「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」が含まれていることが、良好な精神的健康に影響を与えることが明らかとなった。

考 察

1. 「居場所」数と精神的健康との関連

大学生の精神的健康において、中学生の頃の

「居場所」数の認知と、現在の「居場所」数が関連していることが明らかとなり、精神的健康が良好な方が多くの「居場所」を持つ傾向が示された。しかし、「居場所環境」との関連を検討した結果、「居場所」を複数持っていても、「居場所環境」の内容によって、精神的健康は異なってくることが明らかとなった。

2. 現在の「居場所環境」と精神的健康との関連と影響

現在の「居場所環境」では、「居場所環境」と精神的健康との関連を検討した分散分析の結果からは、「社会的活動障害」「うつ傾向」「合計」でA群（「居場所」なし）とB群（ひとりのみ）が健康度が低く、影響力を検討した重回帰分析の結果からは、「居場所環境」の中に「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」が含まれていることが、良好な精神的健康につながるということが明らかにされた。では、3種類すべてを持っているH群が最も良好かという点、一概にそうとはいえないことも見出された。「身体症状」で、F群とH群の間に差が認められており、3種類すべて持つH群の「身体症状」が「家族のいる居場所」のないF群と比べて良好でないことが示された。また「合計」においても、F群の方が低く、良好な精神的健康を示している。影響力を検討した重回帰分析の結果からも、「身体症状」のみ「家族のいる居場所」で有意差が認められ、ある方が良くない傾向にあることが示されているとともに、他ではほとんど影響力を持っていないことも明らかとなっている。このことから、大学生においては、「居場所環境」に「家族のいる居場所」を持つことが必ずしも良好な精神的健康と関連しているのではないことがうかがえる。福岡・橋本（1995）の大学生のソーシャル・サポートと精神的健康の関係を検討した研究では、男子のみではあるが、友人サポートが低い場合には、家族サポートを高く知覚しているほど精神的健康度が悪くなるという結果が出ている。この結果に対し、友人との良好なサポート関係が形成ないし維持されていない状況では結果としてそれ以前から存在する

サポート関係である家族への依存を強め、家族サポートが得られることが時にネガティブな効果をもたらす場合もあると考察している。現在の「居場所環境」においても、「家族のいる居場所」があるということは、他の「居場所」が充実していないために、そこを持たざるを得ないという可能性が考えられる。

3. 中学生の頃の「居場所環境」と精神的健康との関連と影響

「居場所環境」と精神的健康との関連を検討した分散分析の結果から、中学生では、「居場所」がない A 群が全般的に健康度が低く、「家族のいる居場所」が含まれている群が健康度が高いことが示された。また、「居場所環境」が精神的健康に及ぼす影響を検討した重回帰分析の結果からは、中学生の頃に「居場所」があったと認知していること、「家族のいる居場所」があったと認知していることが良好な精神的健康に影響を与えていることが示された。小西・黒川

(2000) の中学生を対象とした調査では、子どもの親とのコミュニケーションに対する認知が高いほど、「心の健康度」が高くなることが報告されている。この調査からは、中学生の親子関係の認知が、その時期の精神的健康度と関連していることが明らかとされているが、本調査からは、その時期だけではなく、以後の精神的健康にも影響を及ぼすことが示されたといえる。「友だちのいる居場所」は、D 群(友だちのみ)・F 群(ひとり+友だち)で「身体症状」が悪く、また D 群(友だちのみ)は「社会的活動障害」「うつ傾向」「合計」で、A 群(なし)とともに良好ではない傾向が示されている。しかし、G 群(家族+友だち)や H 群(3 種類すべて)のように、「友だちのいる居場所」があっても「家族のいる居場所」が含まれれば、健康度は高くなる。よって、「友だちのいる居場所」を持っていること自体が精神的健康に悪影響を及ぼしているのではなく、「家族のいる居場所」がないことが悪影響を及ぼしているといえる。中学生は、思春期に入り、親との心理的距離が離れていく時期ではあるが、この時期に家族のいる場所に

「居場所」があったと認知できることが、後の精神的健康には影響力があり、重要であるといえる。

総合的考察

中学生では、精神的健康に「家族のいる居場所」が果たす役割は重要であるが、大学生ではその役割が薄れ、「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」が重要になってくる。この発達の差異は、興味深い。したがって、良好な精神的健康のためには、中学生の頃にまずは「居場所」があること、そして「家族のいる居場所」を含んだ「居場所環境」を持っていること、大学生では逆に「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」を含んだ「居場所環境」を持つということが重要であることが明らかとなった。つまり、3 種類すべて揃っていれば良いわけではなく、発達に伴ってそのバランスも変化していくことが、良好な精神的健康につながるのである。

本研究は、不登校をはじめとした現代の中学生の諸問題に対し、「居場所環境」という視点からのアプローチを探るための基礎研究として行った。今回の調査において、中学生の頃の「居場所環境」の認知が以後の精神的健康と関連し、影響を及ぼしていることが確認できた。したがって、中学生の「居場所」問題に介入していく意義はかなり高いといえるのではないだろうか。現在、不登校問題に対し、学校内では保健室や相談室、学校外では適応指導教室やフリースクールなど、教室に代わる「居場所」を作る動きが対策として注目されている。しかし、精神的健康に対する長期的な影響を考慮すると、まずはこの時期に家庭にきちんと「居場所」を持つことが最も重要なことであることが結果から示唆された。菊池(1999)のソーシャル・サポートの研究での、中学生で不登校傾向が認められる生徒では家族による情緒的サポートが低いとの指摘もされている。学校に行けないことで「友だちのいる居場所」が持てないことよりも、家族のいる家庭に「居場所」が持てないことの方が、後の精神的健康には弊害をもたらすとい

える。よって、学校に行けないなら他の場所に、
というような「居場所」の提供のみで対応して
いると考えることは、非常に危険ではないだろ
うか。問題を抱えた中学生への対応は、「居場所
環境」の全体をアセスメントし、まずは「家族
のいる居場所」を持てているかどうかを紹介し
ていくこと、そのうえで他の「居場所」を提供
していくということが重要である。

今後の課題としては、以下の3点が挙げられ
る。まず1点目としては、調査方法についてで
ある。今回は、大学生を対象に回想法により、
中学生の頃の「居場所環境」を把握した。回想
法の問題点については、Halverson (1988) も
指摘するように、記憶の変容や忘却の問題が存
在する。よって、実際に中学生の時に感じてい
た「居場所環境」とは差異が生じている可能性
も否定できない。今後は、縦断的な調査ととも
に、インタビューなど質的な調査方法により、
より正確な長期的影響を検討することが必要と
考える。2点目は不適応問題を抱えた生徒の「居
場所環境」と精神的側面との関連と影響との検
討である。今回の対象者は、大学生であるため、
適応的に中学生時代を過ごしてきた人が多いこ
とが推測されるが、そうであっても「居場所環
境」によって精神的健康度に差異が認められた。
したがって、不登校などの問題を抱えた中学生
では、より深刻な影響が懸念されるためである。
3点目は、「居場所環境」の規定要因の検討であ
る。個人の「居場所環境」を規定する要因とし
ては、性格傾向、親との心理的距離、対人関係
など、様々な要因が推測される。これらを明ら
かにすることにより、最終的には、発達段階に
おける「居場所環境」の規定要因とその影響を
包括的に明らかにすることで、「居場所」問題へ
のアプローチを提案していくことにつながるこ
とが大きな課題といえるであろう。

引用文献

- 安齋智子 2003 「居場所」概念の変遷 発達,
24 (96), 33 - 37.
深谷昌志・永井聖二・山田剛 2001 居場所と
しての「学校」に関する考察 一時系列の変

化に視野をおきながら 日本子ども社会
学会第8回大会抄録集, 53 - 54.

- 福岡欣治・橋本幸 1995 大学生における家族
および友人についての知覚されたサポート
と精神的健康の関係 教育心理学研究, 43,
185 - 193.
Halverson, Jr., C. F. 1988 Remembering Your
Parents: Reflections on the Retrospective
Method. *Journal of Personality*, 56, 435 -
443.
檜皮万里子・浅川潔司・古川雅文 2002 高校
生の居場所と学校適応に関する研究 日本
教育心理学会第44回総会発表論文集, 83.
今村幸恵・服部恒明・中村朋子 2003 中学生
のストレス、自己効力感、ソーシャルサ
ポートとストレス反応の因果構造モデル
学校保健研究, 45, 89 - 101.
稲葉小由紀・西悟史・古川雅文・浅川潔司 2001
中学生の学校適応と居場所に関する研究
日本教育心理学会第43回総会発表論文集,
455.
菊池勝也 1999 ストレスとソーシャル
サポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影
響 性格心理学研究, 7, 66 - 76.
小西史子・黒川衣代 2000 親子のコミュニケ
ーションが中学生の「心の健康度」に及ぼす
影響 日本家政学会誌, 51, 273 - 286.
久保 満 1987 ソーシャル・サポート研究の
動向と今後の課題 看護研究, 20, 170 - 179.
松田孝志 1997 現代高校生における居場所
の内包的な構造 筑波大学教育研究科カウ
ンセリング専攻修士論文抄録集, 31 - 32.
文部省 1992 登校拒否(不登校)問題につい
て・児童生徒の「心の居場所」づくりを目指
して(学校不適応対策調査研究協力者会議報
告) 教育委員会会報, 44, 25 - 29.
小畑豊美・伊藤義美 2003 中学生の心の居場
所の研究 - 感情と行動及び意味からの考察
- 情報文化研究, 17, 155 - 167.
岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生
におけるソーシャル・サポートの学校ストレ
ス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302 - 312.

- 小野美也子 1993 保健室に登校してくる子どもたち 教育, 14 - 23.
- 小野修 1994 不登校児の「心の居場所」と思いやりの回復 児童心理, 1, 23 - 28.
- 大久保智生・青柳肇 2000 心理的居場所に関する研究(2) - 居場所感尺度作成の試み - 日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集, 161.
- 坂本昇一 1993 登校拒否のサインと心の居場所 小学館
- 杉本希映・庄司一子 2003 「居場所」の心理的構造とその発達的变化 第 10 回日本子ども社会学会大会抄録集, 85.
- 住田正樹 2003a 子どもたちの「居場所」と対人世界の現在 住田正樹・南博文(編) 九州大学出版会 Pp. 3 - 17.
- 住田正樹 2003b 子どもたちの「居場所」と対人関係 住田正樹・南博文(編) 九州大学出版会 Pp. 101 - 168.
- 高橋哲夫 1994 学校が『心の居場所』であるために児童心理, 6, 15 - 21.
- 田島彩子 2000 青年期のこころの「居場所」 - 「居場所」感覚と抑うつ感 - 日本心理臨床学会第 19 回大会発表論文集, 258.
- 田中麻貴・田寫誠一 2004 中学校における居場所に関する研究 九州大学心理学研究, 5, 219 - 228.
- 富永幹人・北山修 2003 青年期と「居場所」 住田正樹・南博文(編) 九州大学出版会 Pp. 381 - 400.
- 豊田英昭・宮崎世津子・大寺せい子・小澤暁・芳賀明子 2000 小学校高学年児童の「学校における居場所」の研究Ⅲ - 自分の教室の居心地と学校適応感 - 日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集, 461.
- 堤雅雄 2002 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要 人文・社会科学, 36, 1 - 7.
- 上野ひろ美 1992 「居場所」(身体)と「関わり」(対話) - 共同感情の組み換え - 現代教育科学, 10, 28 - 30.

The Relationship between Present “Environment of Ibasho” and Mental Health in University Students, and the Effects of the Past on them

Kie SUGIMOTO

Ichiko SHOJI

The present study examined the relation between “environment of Ibasho” and mental health. Participants, 330 university Students, completed a questionnaire.

The following results were obtained: For the junior high school student, the role that “Ibasho where the family” plays mental health was important. But the role of “Ibasho where the family” weakened in the university student, and “Ibasho of oneself alone ” and “Ibasho where the friend” became important. Because it had become clear that “Environment of Ibasho” when it was a junior high school student had power of the more influence in present mental health than present “Environment of Ibasho” , the importance of junior high school student's “Environment of Ibasho” was suggested.